

1人1台時代の

ICT活用

第7回

学びの個別最適化と

ICT

令和の日本型学校教育と個別最適な学び

文部科学省が「令和の日本型学校教育」の柱のひとつとして「個別最適な学び」を掲げました。この「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」で構成されます。前者は「子ども一人一人の特性・学習進度・学習到達度に応じ、教師は必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行う」こととされ、後者は「子ども一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行う」こととさ

宮坂 直 (スタディプラス株式会社 取締役COO)

れています。そして、「個別最適な学び」の実現にあたり、ある一定の期間をかけて共通に教育を行う「履修主義」にこだわらず、一定の期間における個々人の学習の状況や成果を問い、それぞれの学習状況に応じた学習内容を調整する「修得主義」を採用入れることが提唱されています。また、学習状況に応じて学習内容を調整するのは教師だけではなく、子どもも自己調整しながら学習を進めることが提唱されています。

ここまですが文科省が提唱した「個別最適な学び」です。新型コロナウイルス感染拡大など、社会の不確実性は高まるばかりで、先行き不透明な未来を生きる子どもたちには必要なコンセプトだと感じています。しかしながら、ハードルは高いと言わざるを得ません。仮に1学級35人とした時に、これまでは「履修主義」に基づいて学習内容も学習進度も1通りでしたが、これからは「指導の個別化」に基づいて学習進度は35通り、「学習の個性化」に基づいて学習内容も35通り、大袈裟に表現すると、学習の多様性は35通り×35通り、これまでの約千倍です。既に教師の皆様の長時間労働が問題視されている中、さらなる負担を強いることは現実的とは言えません。本稿では、弊社の教育機関向け学習管理システム「Study plus for School」で様々な教育機関を支援してきた経験に基づいて、学びの個別最適化とICTについてお話しできればと思います。

学びの個別最適化とICT

名前	学習時間	11/14(水)	11/15(木)	11/16(金)	11/17(土)	11/18(日)	11/19(月)	11/20(火)
森下 洋介	56時間 7分	11時間 25分	9時間 11分	7時間 32分	3時間 45分	11時間 3分	4時間 20分	8時間 11分
渡島 朝香	53時間 16分	7時間 3分	5時間 58分	7時間 17分	4時間 16分	11時間 16分	8時間 48分	6時間 38分
橋本 未来	48時間 57分	5時間 0分	5時間 57分	4時間 45分	5時間 21分	11時間 1分	9時間 56分	6時間 57分
岡本 雄	40時間 55分	4時間 50分	5時間 30分	6時間 40分	3時間 35分	7時間 30分	6時間 50分	6時間 0分
杉田 景子	38時間 10分	0分	5時間 58分	8時間 43分	5時間 37分	10時間 36分	1時間 2分	6時間 14分
五十嵐 真	34時間 59分	4時間 43分	6時間 13分	6時間 43分	3時間 11分	7時間 9分	1時間 51分	5時間 9分
平井 奈々	32時間 3分	0分	6時間 0分	7時間 42分	4時間 9分	6時間 5分	3時間 38分	4時間 19分
矢作 麗華	30時間 22分	4時間 14分	5時間 5分	3時間 28分	3時間 16分	4時間 54分	5時間 3分	4時間 22分
尾崎 望々美	25時間 49分	1時間 55分	1時間 33分	3時間 18分	0分	5時間 22分	6時間 51分	1時間 50分
藤田 真人	24時間 20分	4時間 52分	4時間 7分	5時間 10分	2時間 27分	5時間 18分	0分	3時間 24分
藤野 悠太郎	24時間 3分	15分	3時間 10分	4時間 45分	3時間 45分	1時間 31分	7時間 15分	3時間 20分

図 「Studyplus for School」の学習時間分析画面

私が「個別最適な学び」や「自己調整学習」を考える際に、「シチュエーションナル・リーダーシップ理論」(以下「SL理論」)を参考にしています。「SL理論」は、チーム内の多様なメンバーに対して、リーダーは一律に指導するのではなく、メンバーの成熟度に合わせて関わり方を変えるべきという理論です。メンバーの成熟度を四つのレベルに分類し、成熟度が高まるにつれて、①指示型、②コーチ型、③援助型、④委任型と、リーダーからメンバーへの指示は減少し、メンバー自身の裁量が増加することで、メンバーの成長を促します(成熟度が高いメンバーに細かい指示を与えていては、自ら考え成長する機会を奪うばかりです)。成熟度が低いメンバーに細かい指示を与えなければ、何も

できずに自己肯定感を得る機会を奪うばかりです)。子どもも最初から自己調整しながら学習を進めることは難しいと思います。ですから、教師は子ども一人一人の自己調整力を測りながら、自己調整力が高い子どもには学習方法や学習計画を生徒に委ねることで自ら考え成長する機会を提供し、自己調整力が低い子どもには教師の支援を通して学習成果とそれに伴う自己肯定感を得る機会を提供することが理想になるのではないのでしょうか。

しかし、子どもの自己調整力を測るのは簡単ではありません。子ども一人一人の学習進捗を把握したい一方で、子ども一人一人と毎週面談するわけにはいきませんし、学習進捗を紙で毎週回収するのも大変です。教師の皆様の日々の忙しさを考えれば、デスクで少し時間ができた際に、子ども一人一人の学習進捗を簡単に把握できて、簡単に指導できなければなりません。これらを実現するには、教科学習から探究学習まであらゆる学習記録をデジタル化し、教師がいつでもどこでもオンラインで学習記録を確認し指導できるようにするしかないのではないのでしょうか(と考えて、弊社では教育機関向け学習管理システム「Studyplus for School」を開発・提供しています)。それでも教師の皆様の負担はまだまだありますが、デジタル教材の普及によって先生が指導する比率が減少し、生徒が自習する比率が増加し、教師の皆様の学習指導の時間が少しずつ浮くことで、学習管理の時間を少しずつ確保できるようになり、「個別最適な学び」が少しずつ実現に近づいていくのではないかと考えています。

(一社) ICT CONNECT 21 — 「教育の情報化」に関する皆さまにオープンな場を提供し、コネクすることで教育を良くしていく団体。教育とICTについての情報を毎週メルマガで配信中!

